

## 要旨

**I. 目的** 本研究は、熟練の一般病棟看護師がどのように患者・家族の状況を査定し患者・家族が終末期の過ごし方について考える時期と判断しているか、また、どのように患者・家族が終末期の過ごし方について考えることができるよう援助を行っているのかについてインタビューを通して具体的な支援過程の要素を抽出し構造化することを目的とする。

**II. 方法** 本研究は、質的帰納的研究である。がん患者・家族が終末期の過ごし方について考えるための一般病棟看護師の看護を帰納的に引き出し概念化し、看護の持つ意味と周囲とのやりとりに焦点をあて現象の構造とプロセスを把握するため、グラウンデッド・セオリー・アプローチの継続比較分析 (Strauss, et al, 1994) を行い、看護師の支援過程のプロセスについて、帰納的に概念の抽出と理論生成を行った。

**III. 結果** 分析の結果、5 個の主要なカテゴリー、14 個のカテゴリー、58 個のサブカテゴリーが抽出された。主要なカテゴリーは、『患者の意向を引き出す』という中核カテゴリーと、【患者の全体像を推測する】【患者の意向確認の必要性を判断する】【患者の意向と現状を統合し方向性を予測する】【患者の意向に沿った方向性を共有できるよう調整する】という主要なカテゴリーが抽出された。『患者の意向を引き出す』は、他のすべての主要なカテゴリーに関連した中心的な存在であった。がん患者が終末期の過ごし方について考えるための支援過程において、看護師は入院時の患者の状況から【患者の全体像を推測する】【患者の意向確認の必要性を判断する】を行い、介入の必要性を判断していた。それと平行して『患者の意向を引き出す』を行いながら、患者が終末期の過ごし方についてどのような意向を持っているのかを引き出すために意図的な介入を行っていた。その過程で得られた患者の意向と病状や病勢など今後の展開を統合し看護師として患者の今後の方向性について明確にし、患者と家族間や医師など医療者と【患者の意向と現状を統合し方向性を予測する】【患者の意向に沿った方向性を共有できるよう調整する】を行っていた。また、この過程においても常に『患者の意向を引き出す』を並行して行いながら、状況や時間経過によって変化する患者の意向を的確に捉えていた。

**IV. 結論** 看護実践への示唆として、一般病棟看護師の患者の意向を引き出すことが重要であること、適切なタイミングでがん患者が終末期の過ごし方について考えることができるよう end-of-life discussion を行うこと、end-of-life discussion を行うためのプロトコルやトレーニングの確立が求められていることが示された。